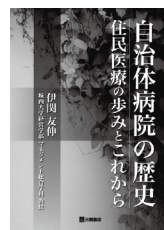


伊関友伸（著）

自治体病院の歴史 —住民医療の歩みとこれから

江 藤 文 夫

（国立障害者リハビリテーションセンター顧問，医師）



自治体病院は地方公共団体が経営する医療機関で，地域における基幹病院として，へき地医療を含めて民間病院では採算性が確保されないような困難な医療を担ってきた。しかし，経営効率が優先される今の時代に「自治体病院の存在意義」を議論するためには，その誕生の経緯や果たしてきた役割を踏まえることが必要である。歴史は，物事の始まりを記録するものであり，それにより未来を指向する議論に資することができる。伊関氏は，膨大な資料に基づき自治体病院の歴史をまとめることで住民医療の将来を構築するための貴重な資料を提供した。

通読しながら，なるほどと今になって気づく個人的な思い出があった。医師資格を取得して間もない昭和40年代の末に，長野県の佐久総合病院を見学した。それとは別に，東大病院第3内科での研修歴の縁で，浅間病院で1週間ちょっと病棟の手伝いを要請され，病院に寝泊まりしたことがある。あさま山荘事件の余韻が残るころであった。前者がJA厚生連，後者が国保直診の医療施設であることを知らず，関心もなかった。佐久を名乗っても前者は佐久市（当時）にはなく，後者が佐久市立であることを興味深く感じただけであった。

住民が健康づくりを行い，医療費総額を抑えようという予防医療の考え方や，医療と福祉と健康づくりを一体的に運営する地域包括

ケアの考え方は，医療利用組合や国保直診の医療機関から生まれてきた考え方であった。本書では「地域医療」の代わりに「住民医療」という言葉を使用している。地域における医療を守っていくためには，住民は「お客様」ではなく，「当事者」として参加することが必要であるとの考えに基づく。「住民医療」の言葉を最初に提唱したのは前述の佐久市立国保浅間総合病院院長の吉澤國雄だそうである。病院長の吉澤は東大病院沖中内科から，副院長の福内匡夫は同じく木本外科からの人脈である。一方，佐久総合病院長の若月俊一は同じく大槻外科の人脈である。歴史では，制度的なものだけでなく，現場の人間関係も無視できないように感じる。

本書では，「明治期からの公立病院の隆盛と衰退」に始まり，第2章で大正デモクラシーと医療の社会化運動について記述する中で太平洋戦争に向けての厚生省設置から戦時下での健康政策に触れ，以降でGHQによる改革，国民皆保険の達成と昭和高度経済成長期に派生した諸課題，医大新設ブームと医療費抑制政策の時代を経て，新自由主義的行政改革の現在に至る自治体病院の歴史軸を整理して，自治体病院の存在意義について論じている。そして住民医療の将来に向けた課題を多数指摘している。その多くは同意できる内容であるが，容易ではないように感じるのは，住民の根底にある「人

任せ」の意識である。

歴史的に続いてきた「お上頼り」の意識は，いつの時代に由来するかの歴史認識も重要である。脱藩してまで個人の責任で行動した志士たちに代表される明治維新原動力の側面を強力に抑制し，江戸時代を封印した明治期前半の政策をあらためて考察する必要がある。衛生自治を放棄し，衛生警察を普及させることに抵抗はほとんどなかったようである。簡単には中国文化を捨てられない中国大陸諸国に比べ，中国文化からヨーロッパ文化に容易に乗り換えたわが国ではあるが，独創性がないわけではない。江戸時代には読み書きができずとも，「学医はさじが廻らぬ」として百姓医が活躍し尊重されたという。しかし，病院は発達せず，医師が専門職集団として厳しい倫理規範をもって医師を養成するシステムを形成することなく，西洋の外形を模倣し，国家権力により資格制度を導入した歴史が，医学教育や開業医制の今日の課題にリンクしているように感じる。その視点から，住民全員が意識を変え，互いにつながり，行動していくことが必要であり，民主主義の再生（創生？）の可能性を信じたい，とする伊関氏の考えに全面的に同意である。

A5判 710頁 3,800円＋税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357